

# 飛耳長目

森 信 三 先 生 参 究 誌

通巻81号 平成22年8月1日発行

## 『修身教授録』探求 (第四十六回)

### 三十一 徹底

森 信 三

徹底といふことは普通には男子のことであつて、女

子にはその必要がないばかりか、むしろ女には下手にかよつたことを言うのは、有害とさえ考えられているよつであります。またそれには確かに一応もつともな点があるとも言えるでしょう。いつも申すように、女といふものは男子のようになた一つのこととさえ貫き通せば、それで良いといふものではないからです。すなわちすべてのことが満邊なく調和的にできなければならぬところに女子特有の道があり、男子のそれと異なる所以があるからです。では女子は不徹底でもよいかと申しますと、これまた容易に然りとは言えないであります。なるほど女の仕事といふものは、大抵家庭内の仕事でありますから、ある程度にいい加減にやつていても、どうにか曲りなりにその日が暮れて行かぬものでもないでしょう。例えば料理などにいたしましても、ただ単にお腹が膨れさえすればよいといつたけならば、それほど苦心もいらぬわけでしょう。現に世間多くの主婦は、この調子で十年一日のごとく進歩しないとも言えまじょう。その他すべて女の仕事と

いふものは、直接対外的な公な性質を持つことの少ないために、ついズルズルでも、その日が済まぬわけでもないのです。そうしてこの点に私は女子の修養上最も大切な点があると思つのです。

そもそも男子の仕事といふものは、全てが直接対外的の仕事であり、さらにまた職務の如何によつては、公の性質さえ持ちますから、従つて男子の仕事は中途半端のいい加減で済ますといふことは出来にくいものであります。例えば郵便配達夫にしても、もつくとびれた「からとか」じゃまくさいから「などと言つて郵便物を正しく名宛人に配達しなかつたとしたら、それこそ実に大問題でありまじょう。否郵便物ほどに公の性質を持たない新聞紙とか、または牛乳などにしましても、何十軒、何百軒といつお得意様のうち仮にただの一軒でも手抜きをしたならば、たちまちそこから苦情が出ることは火を睹みるより明らかであります。しかるに今女の仕事となりますと、お茶碗の洗ひ方がやや粗末だつたとしても、内輪同志うちわどうしのことでありまから、まあまあといつことで済んでしまひます。もしこれが宿屋とか料理店などであつたならば、あんな食器の洗ひ方の粗末なところは、一度と行けない」となつてたちまち客足が減るでありまじょう。また例えば家計

簿などにしまして、世間には案外家計簿をつけない奥さんが多いようではありますが、これが男子となりまして、会社官庁その他いやくも出納を受けもつ身として、その記帳に手抜きがあるようでは、一日もその職にはおれませぬまい。かように女の仕事というものは、その種類が多種多様にわたること、内輪相手といふことからして、つい不徹底でもある程度まで事が済んでいくという傾向があります。同時にまたここに徹底といふことが婦人に対しては余り言われない所以があるかと思われませぬ。

しかしながら本当の仕事といふものは、決して中途半端な、いい加減の態度で出来るものではありません。かようなことは今更申すまでもないことですが、ご参考までに婦人の仕事のうち、ズルズルべったりの不徹底な態度では、どうしてものつびきならぬようにならざる事柄を一二挙げてみましょう。その一二は家計です。一家の経済といふものは、いい頃加減なその日暮しでやっていますと、そのうちにはどうにもならぬ時がやってくる。元来お金といふものは一銭一厘でもごまかしの利かないものであります。十円の汽車の切符は9円9角銭持っていて、不足はわずかに一銭でも「まあ負けておいて」なるといふことの出来ぬもの

であります。私思つのですが、近頃の婦人は一般に家計が下手になりつつあるのではないのでしょうか。特に職業をもっている婦人、ないしはかつて職業に就いていた婦人は概して家計のますい傾向があるようです。もちろん例外はいくらでもあることですが……。いずれにしても近頃の生活難は主婦たるものの家計に対する不徹底といふことが、その根本原因をなしていると申してよいでしょう。

さらに子どもの躰けにいたっては、最も徹底を要することでありませぬ。すなわちいつも申すように、躰けといふものは全く子どもとの根比べと言つてよいのです。ところが徹底性を欠いてきた近頃の若い奥さん方には、とかく面倒臭がつて、子どもとの根比べに直き負けてしまつたのです。「じゃまくさい」といふ一語は最もよくこの辺の消息を示す言葉と申してよいでしょう。そのため妙に、野放図な子どもが出来上がつてどうにも手がつけられなくなつてから、いかにメステリックにグチをこぼしてみたとして、今更どうなるものでもないわけではな。

以上はわずかに一二の例を申したにすぎませんが、しかしこれだけ申しても、女子も男子に劣らぬだけの徹底性が必要なおことがおわかりでしょう。すべて物事

といつものは、最後のとどめを刺すところまで行かねばならぬものです。とどめを刺すことを忘れると、大丈夫死んだと思つていたものが意外にも甦つてくる。

現に子どもの躰けのこときも全く子どもとの根比べであり、さらには子どもとの刺違えと申してもよいでしょう。そこでこの癖だけは、どうでも根ごきにしておいてやらねば、この子の将来のために可哀相であるといふ親の慈愛の一心より出る徹底性によらない限り、なかなか直るものではありません。かくして我が子に対する躰けの徹底は、結局愛より生まれるといふほかないでしょう。また家計などにしましては、夫のため、さらには我が子の将来のため、どうしてもしかりしていなければと思つ心の一念からでなければ、到底一銭一厘の収支をも明らかにして家計を引き締めるといふことはできないでしょう。それゆゑ家計簿をつけることを煩がつて、不徹底なズルズルべったりのその日暮しをするといふことは、夫に対してはもちろん、さらには我が子に対しても真の愛敬の念無きなによりの証拠といつべきでありませぬ。

かくして婦人の不徹底性は、これを突き詰めて申せば、結局夫や子どもに対する愛の眞実ならざるに基づくものであつて、もしその愛にして眞実であるなら

ば、妻として主婦としてまた母として、自己の当然為すべき仕事は、いかにその種類が多種多様であろうとも、常に全力を挙げてこれを為し、その底を尽くしてなお足れりとせぬ底の充実を期し得べきはずであります。かく考えてきますれば、徹底といつことを以て、単に男子のことのみとするこの誤りであることは申すまでもないことであって、女子といえどもその真実心は、必然自己の気持ちの仕事の上に、充分なる徹底性として実現せらるべきであることを忘れてはならぬであります。(河原辰子記)

「修身教授録」第四巻同志同行社昭和15年刊・天王寺女子師範における講義から)

### 森信三先生の短文紹介

## 微言

「開頭」9号から

森 信三

イスラエル民族における民族神観から世界神観への展開は、「旧約」より「新約」への展開であるが、日本民族におけるそれは従来天<sup>あめの</sup>之御中主神<sup>みまなかぬしのかみ</sup>を宇宙神と考え来った思想から、この神もまた「成りませる」神であったことの認識よりして、その「成りの根源」に遡<sup>さかのぼ</sup>及

し、そこに絶対に不可説不可称なる唯一真神の在<sup>あ</sup>りますことを知るに至ることである。

○イスラエル族にあつては、その民族神観より世界神観への展開は時間的に行われた。すなわち「旧約」におけるエホバの神は「新約」に至つて「エホバの」という固有名詞的形容辞を脱落せしめて初めて真の世界神格を得た。

然るに日本民族にあつては、その民族神観より、世界神観への展開は逆時間的(すなわち遡<sup>さかのぼ</sup>源的)本質的に行われる。「新約」の神はその本源を衝く時「旧約」のエホバの神たらざるを得ない。すなわち民族神たるの生地を暴露するが、われらの民族神観はその根源を衝くことによつて、かえつて世界神観に至るのである。すなわち天<sup>あめの</sup>之御中主神<sup>みまなかぬしのかみ</sup>の成りの根源に絶対無限なる唯一真神の神の在<sup>あ</sup>りますことを知る。等しく選民思想によつて国を誤りつても、彼は国を滅ぼし、我は亡国の一步手前で救われた所以の根由<sup>こんゆ</sup>は、この根本的相違に基づくのであろう

○唯一真神は本来いかなる意味での命名をも許さない。名付けられたる神はこれに名を賦

与せる民族または宗派の者は絶対神と考えても、それ以外の者からは受け入れられない。

○地上の民族が、従来絶対としてきたそれぞれの民族神または教派神の底を抜いて、そこに絶対無限定、いかなる意味でも命名することのできない唯一真神を仰ぐに至るまでには、地上に真の究竟<sup>くききやう</sup>的平和は招来しないであろう。

○世に「平和」の言を為すほど易くしてしかも外面上美しいことはない。しかも「平和」の実現ほど世に至難なることはない。今自の第二次世界大戦ほどの巨大なる犠牲を払いつつ、人類は果たしていかほど真摯に世界および人類の「平和」を希求しているといえるであろうか。

○自己の信ずる宗派ないしは民族神のみを絶対とし、さらにはこれを他に強要せんとしている間、地上には真の平和はもたらされないであろう。

○人類が今日世界平和を希求していないとは思わない。否おそらくは人類の歴史上未<sup>み</sup>曾有<sup>ぞう</sup>の熾<sup>し</sup>烈<sup>れつ</sup>さを以て希求しはじめたと言えるであろう。しかも神の世界平和実現のためには、

人類はそもそも何を為さねばならぬかを真に考えるまでには至っていないようである。それはただ一事「神のものは神へ返せよ」というキリストの言を国家民族を主体として敢行することである。もし現在すでにあらゆる民族が、この真理に目覚めながらしかもそれを実現し能わぬというのであれば、それはもはやただ人類の「業」というの外あるまい。

○「業」とは人間的理性はこれを肯定しつつしかも現実にはこれを敢行することのできない肉体に根ざす「闇」をいうのである。人類は今や深刻に世界平和を求めつつ、しかも、そのために最も切要なることを断行しかねている。(このことの第一歩は武装の放棄であり、その根本は「神のものを神に返せ」ということである。)ここに人類の「業」があるが、人類がこの業を果たすのもさまで遠いことではないかも知れぬ。

○個人間でも自己と同程度に：少なくとも8割程度までは相手の立場を認めるでなければその関係は永続し難い。この真理は国家民族の場合にもまた同様である。否国家を主体と

するとき、この言葉の意味する真理ははるかに深く妥当する。個人として神を信じた人間は古来決して少なくない。しかし国家民族を主体として、神の前に悔い改めた国家民族が今日まで果たして一つでもあったであろうか。私は日本民族がかかる道への第一歩を踏み出す最初の民族たることを祈念してやまない。

(「開頭」第9号 昭和22年10月)

【注】 天之御中主神 (アメノミナカヌシノカミ) は、日本神話に登場する神。天地創造に関わった五柱の別天津神(ことあまつかみ)の二柱。『古事記』の天之御中主神 『古事記』では、天地開闢の際に高天原に最初に出現した。

あとがきに替えて

今年(2010年)は敗戦65年の節目。酷暑の広島・長崎の原爆慰霊祭に初めて国連の事務総長が出席するという。もし実現ならまさに画期的事件であろう。森信三先生が微言で示されて60余年の月日を経た。なお愚生の考えでは森信三先生の杞憂は消えてはいないばかりかやや後退の感なきにしもあらず。やはり人類の「業」なのかと思う…。それは大変残念は言辞ではある、が現下世界の情勢を俯瞰すれば納得がいくというものである

う。ことはイスラエルに関する問題に止まらない。我が国の隣国のロシア・北朝鮮・中国のいずれもが自国の国益のみ考慮し、着々と我が日本を食いものにしようとしていることは明々白々であつて何であろう。詳しくは姉妹紙「下学」に譲るが、日本の政界もまた国益より党利党略・個人的自利のみに汲々としているではないか。情けない限りである。(二繁)

第87回「かよう会」のご案内

日時 平成22年 8月17日 (火)  
18時30分～(毎月第三火曜日原則)  
場所 四ツ橋ビル地下1階『会議室』  
「電話」(四ツ橋ビル 管理事務所)  
06-6531-3686

交通 地下鉄：四つ橋線四ツ橋駅下車  
2番出口へ。歩30秒  
「長堀鶴見緑線」並びに「御堂筋線」  
心斎橋駅及び「クリスタル長堀」との  
連絡口で直結。

テキスト 森 信三著「修身教授録」(致知出版)  
2300円 (大きな書店で購入)  
8/17諸君らの将来  
9/21一道をひらく者(1)  
10/19一道をひらく者(2)

参加費 1000円

〒633-0003  
桜井市朝倉台東二丁目五三八一八九  
TEL・FAX 0744-451-3422  
E-mail: hji@ken.jp  
http://web1.ken.jp/syushin/

